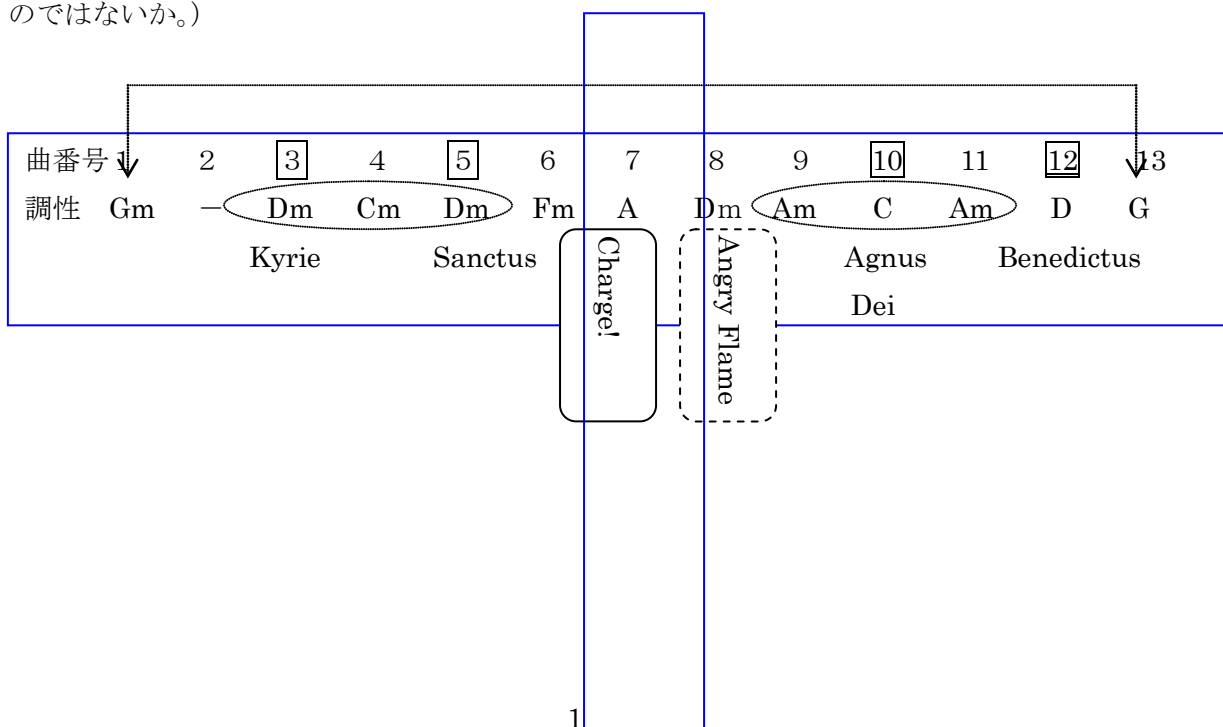


■曲の構成について

戦争という重いテーマであるが故に、全体はマイナー（短調）を基調として構成されることが予想される。しかし“平和への道程”が主題と考えれば、後半、特に最後はメジャー（長調）で終わるべきであろうし、実際そのような構成（「Agnus Dei」, 「Benedictus」は長調）に変移していく。すなわち、前半、中盤の重い歌詞から、後半は「Benedictus」から『主を誉め讃えよ(Praise the Lord)』という歌詞に向かって明るい調性へと変化し広がって行くというわけである。

また、マイナー・メジャーを通じて全体の調性は極めてシンプルである。複雑な形態を取り込まず、反復を主体とした平易な音列で描かれていることを考えれば、調性自体もシンプルにならざるを得ないのであろう。リズムやオーケストレーションにオリジナリティを持たせつつも、コーラス部分はあまり複雑にはせず、世界中の多くの人々に歌ってもらいたいという作曲者の願いが伺える。

全体は、十字架を模したいわゆる《シンメトリー構成》の形式が取られている。曲全体を冒頭と終曲の L'homme arme の歌詞で挟み、(恐らく)「Charge！」を中心に据えてミサ通常文の「Kyrie」「Sanctus」を前半に、「Agnus Dei」「Benedictus」を後半に据わり良く配している(下図参照)。「憎い」構成である。また、通常は最後に来る「Agnus Dei」より後に「Benedictus」を配したのは、その後続く“平和への道程”の主題となる終曲、そして最後のアカペラ『Praise the Lord』への序章としたかったのだろう。(「Agnus Dei」の『Dona nobis pacem』が最後となってしまっは作曲者の意図は強く伝わらないと考えたのではないか。)



1 番に対比する 13 番は、同じ *L'homme arme* の歌詞を英語に替えてメッセージ性を持たせ、調性をメジャーに変化させ、アカペラで締め括っている。特に長丁場の終曲前半は華やかだが‘祈り’を以って歌いたいものである。（だから 13 番にはフォルテを超える強さの指示はない。）叫ぶことなく、しかし強く願う‘祈り’こそが終曲に求められている訳である。

ジェンキンスは何故 15 世紀以降フランスで歌われてきた *L'homme arme* の歌詞とメロディをこのミサのテーマに使ったのだろう。それはこの曲が辿って来た「悲劇」の歴史に注目したためではないかと思われる。当時この誰が作ったか分からないメロディは世俗音楽として広く一般民衆に親しまれていた。そして同時代の作曲家がこれを見逃すはずはなく、彼らがミサなどの宗教曲に使い始めたのは自然な成り行きであったと考えられる。一方でこの超有名なメロディが戦いの場で使用されることは時間の問題であった。神を誉め讃える歌が戦意高揚の歌に摩り替わってしまった「悲劇」である。

ジェンキンスはこれを本来の民衆の歌、そして神を讃える歌に戻そうと考えた。民衆の歌が戦争を讃える歌であってはならないと考えたのだろう。戦争を讃える歌が世界からひとつ消えて、心の拠りどころとなる音楽に昇華していくことを希求したのかもしれない。中心に据えた「Charge！」の歌詞に、その意図が皮肉な形で込められている。

■ 跳躍音型に込められたもの

曲の根底に流れるものはやはり戦争悲劇に対する訴えと音楽そのものへの回帰と言えよう。心の拠りどころとなるものが在るべき形へと戻り繋がっていくときにこそ、人間愛と絶対的なものが、きっと復活すると信じているのではないだろうか。

この在るべき形への回帰をもし音で表わすとすれば、それは緩い上昇音型ではなく、変わりたいという意思が込められた、それこそ伸びのある跳躍音であろう。例えば、ドからファソへの 4 度、5 度跳躍であったり、或いは華やかな 6 度跳躍（ドからラ）である場合も考えられる。

これらの跳躍音型は全体を通して随所に見られ、華やかな 6 度跳躍（ベートーヴェンが第九にも取り入れた歓喜への跳躍）は最終曲アカペラの後半に現れる。即ち、天の高みに在る神への崇拝、願いがこの跳躍音型に込められているのである。

■ 歌詩について

ミサ典礼文やアラーへの祈りなどを取り込みながら、ジェンキンス自身親しみのある自国の作家によるテキストを、しかも全体のほぼ中心に据えたことは賢明であろう。一方、彼が峠三吉を選んだのは、日本が唯一被爆国であり、一瞬にして最大の戦争悲劇を生んだことに対する、警鐘責任と悔恨の表れではないだろうか。（峠三吉の詩が付された曲の部分だけでは広島原爆ということは限定できないが、「原爆詩集」から抜き取ったその歌詩は

他を圧倒してリアルで、かつ悲惨である。) ジェンキンスはこの人間史上最大の戦争悲劇を取り上げずにこの作品を完成させることは恐らくできないと考えたのであろう。

時の流れとともに風化されようとする記憶に逆らい、目を見開いて警鐘を鳴らす彼の姿勢が、この曲を聞き手の前面に押し出す。一方聞き手からすると、作品が被爆国ではないイギリス人によるものであることを認め、改めてある種の連帯感を感じ取るのである。

しかし悲惨な詩ばかりではない。最後は神を崇める方向へと導かなければならないのである。Ring, Ring ~平和への鐘をならそう~というテーマが高らかに鳴り響いたあと、『主を誉め讃えよ(Praise the Lord)』が繰り返シアカペラで奏される場面は印象的であり、そして最後にその言葉は完全5度の和音として神聖に染み渡るのである。

■ 作曲者について

作曲者カール・ジェンキンスは1944年2月17日イギリス、ウェールズ地方で生まれた(現在66歳)。ウィキペディアやYou tubeで見ると今の彼は、髭を蓄えずんぐりとしている。聖歌隊長であった父親の手ほどきを受けてピアノやオーボエを学び、ユースオケの首席奏者なども務めたのち、大学を卒業してからはロック、ジャズに傾注してCMの作曲などを手がけた。日本では「アディエマス」ユニットの作曲者として知られ、NHKの「世紀を超えて」の主題歌やANAのCMでも耳に馴染んでいる。フィギュアスケートの村主章枝はリンクでジェンキンスの曲を使い、彼女のために「Fantasia」という曲を書き下ろしたことも知られている。

ジャズやロック路線を辿って来ただけあり、独特のビート感やジャズコードが随所に現れる。オーケストレーションもしっかりしており、特にパーカッションの使い方が巧い。無調的な音楽や作曲家が氾濫する中、極めて判り易く、且つテーマを何回も繰り返す作風は、あらゆる国々の多くの人々の琴線に触れるであろう。

舞台では演奏に留まらず、視覚要素を盛り込んだシアター的な演出も取り入れている。“The Armed Man”のステージを観ると、戦争のシーンが奥のスクリーンに延々と流れている。映像がなくても十分に悲惨さは伝わってくるのだが、彼は、言葉の分からない人や耳が不自由な人たちにも音楽を伝えたかったのではないだろうか、世界中の全ての人たちがこの音楽を体感できるように…。

2010年11月